書評

佐々木雅發著『鷗外と漱石――終りない言葉』

三好　行雄

佐々木雅發氏の名前をわたしが最初に記憶したのは、自然主義の研究者として、とくに藤村文学についての執拗、緻密な作品論によってであった。作品にアプローチする視座の独創性と、どこか瀟洒な語りくちの説得力とが印象的だったが、氏のはじめての著書である本書にも、その特色はあざやかである。

本書は『吾輩は猫である』以下、『坑夫』『それから』『こゝろ』の四作品を論じた漱石論と、『灰燼』と『阿部一族』を対象とする鷗外論を主体として編まれ、他に、二葉亭四迷の『平凡』と、正宗白鳥の『文壇人物評論』に関する論稿を収めている。

〈終りない言葉〉とサブタイトルにあるように、言語芸術としての小説の特性を――作家の書くという行為と、書かれた言語の自立的な機能とを相対化することで――書く主体と、かれの紡ぎつづける言葉との相関運動として明らかにしようとする新しい試み、いわばあらたな文体論ないし表現論の構築が志向されているらしいのが、まずもって印象ぶかかった。

その特色は、『吾輩は猫である』（以下『猫』と略記）を論じた巻頭の文章に、もっとも顕著である。著者はまず、この長篇の節目ごとに奇妙な沈黙の気配のただようことを指摘する。猫の視野から人間の影が消え、移ろいゆく自然の〈不在〉〈無〉の影が濃くただようとき、「暗い〈時間〉の流れとでもいうべきものが重く耳を打ってくる」「その無限のくりかえし」――これはいったいなにを物語っているのかという問いから、氏の論ははじまる。猫の批判（言葉）は現実に対してついに無効であり、しかも、猫がそれを知りつつとめどなく語るという小説の基本構造から、不在と沈黙のなかに言語が消えてゆくゆえんが説かれるのである。「その〈言葉〉のもっとも根源的な否定性」こそ、漱石が猫に託した「苦い認識」であった、そこに処女作にふさわしい「〈書く〉ことの究極の体験があった」というのが、氏の結論である。

『坑夫』論は「彷徨の意味」というサブタイトルを持つ。それはまず、性格を喪失した青年（自分）の生の形式として現われ、同時に、「虞美人草」で小説の不可能性（自己の小説論の破綻）に直面した漱石が、あえて小説の成否を問おうとする「危険な実験」にもかかわっていた。「自分」はくりかえし死の不可能性に直面しながら、なお辛抱し、堕落して生きようとする、そのことこそが人間の〈生〉の実相であり、人に残されたすべてだと著者はいう。彷徨の背後におのずと浮かびあがる意味のなかに『坑夫』の書かれざる結論を読む氏は、そこにまた、漱石自身の周辺を書くことによって中心を喚起するという「〈書く〉ことの本質に関する……根源的な予感」を読もうとするのである。

『それから』私論――漱石の夢――」は、漱石がのちに『道草』で描くことになる養父との煩雑な折衝の時期に『それから』が起稿されたという事実、あるいは作中で批判されている『煤

煙』の問題などに言及することから論がはじめられている（著者は前者から、現実を越えた憧憬の世界への希求を想定し、後者から、愛についての激越な反応を読む）。そうした作品外の視点が導入されたことで、前二篇とはやや違った方法が採られているかのようであるが、氏の論理はそれをいわば導入部として、強い求心力とともにやはり作品の内部に回帰し、「御前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」という『道草』の問いを代助の背徳の愛に重ねながら、かれの狂気に賭けた作家の自己絶対化の試みと、それが現実によって腐蝕されてゆくことの恐怖を、そこに読むのである。

『こゝろ』――父親の死――」の方法は、『猫』論のそれにもっともちかい。小説の中心から「聞こえてくる」「泌み入るような静けさ」を読むことから、論ははじまっている。それは人の生死の「黙々たる往還の響き」にほかならず、佐々木氏によれば、「私」は両親の家で聞いた蟬時雨の背後から「夢のように近づき遠ざかる静寂」を確かに聞きとっていた。この冒頭の一節はやや論証抜きの美文にすぎるとの印象もぬぐいがたいが、それは氏の漱石論に時に感じられる危うさでもある。もちろん、その「黙々と過ぎゆく時間に身を委ね」て死んだ「私」の父親と、「性急」に過ぎた先生の死とを対比しながら、「悠久なるものの流れ」を実感して東京に帰る「私」によって、先生の死が越えられる可能性を読もうとする氏の論理は、それなりに説得力を持っているのだが……。

総じて、著者の漱石論の言葉は論理と実証のはざまを埋めるためにではなく、論理自体によって、先験的な命題を実証しようとする試みとして現われる。それが成功したとき、氏の感性ないし直観は論理とのみごとな統一のもとに、論の内側に美しい緊張をもたらすことになる。しかし、ことばだけ（？）によって構築された世界は、しばしば別なことばによるアンチテーゼを許す。たとえば、「自殺によって終りを希望し、しかもある真理の端緒として蘇ろうとしている」先生の混濁を指摘する氏は、それを自殺そのものの混濁に帰して、つぎのように注記する。――〈己れが己れを殺す〉という行為は、〈己れを殺す〉という形で否定するものを、己れが殺すという形で肯定しなければならないのだから、と。しかし、氏のいう主体の否定と肯定の矛盾は、己れを殺すという形でしか証明できない自己肯定の論理がありうるという主張までもくつがえさない。さもなければ、われわれはある種の自裁者の心理――殉死や諫死の行為を正確に理解することは不可能になるだろう。みずからを「時勢遅れ」と認めながら死んだ先生は同時に、そのことによって自己の倫理のありかを証明した、それは「悠久なるものの流れ」に身をまかせることの拒否であり、そこには混濁と呼ばれるにふさわしいものはなにもなかった。先生の遺書が自殺の説明として「一体どれほどの深刻な力を持ちえている」かを問う著者に、先生は乃木の殉死にみずからを重ねた行為によって、ことばを越えたのだという「ことば」をかえすこともできるのではないか。また、言葉が漱石をさしおいて「一人歩きする」という『猫』の発端の論理にしても、ほかならぬ漱石が、あたかもそう見えるように書いている、だから、猫の言葉の

無効性もまた、書き手としての猫と、書かれる対象としての苦沙弥に自己を分離した諷刺の方法に帰することもできる、という別な「ことば」も聞えてくるのである。

漱石論にややこだわり過ぎたようだが、これは鷗外論の二篇には、さしあたって批判の余地がないというに尽きる。「『灰燼』論――挫折の構造――」は方法的に漱石論の延長上にある論文だが、『灰燼』の執筆と挫折を、当時、鷗外の直面していた「人間の絶対的な危機」の感覚と重ねて論じようという意図は、小説の一行一行に分けいり、行間の声を聞くという執拗かつ丹念な分析と、意識家鷗外についての明析な解析とによって、みごとな説得力をそなえている。著者の意図は「絶対の〈覚者〉山口節蔵」を創造した鷗外のモチーフのなかに、いわば『灰燼』を挫折にみちびいた逆説をさぐる試みとして要約できると思うが、その結論はつぎのような形で示される。

《鷗外が絶対の〈覚者〉山口節蔵から永劫に隔絶されている以上、鷗外には、節蔵の、その絶対の〈覚者〉への〈跳躍〉を辿ることは、これまた永劫に不可能なのだ。／そしておそらくここに、『灰燼』中絶の真の原因があったといえよう。それは決して外部の力ではなく、〈文学〉の内部、つまり、〈書く〉ことのもつ、一種絶対的な矛盾構造に関わっている。》

書く主体と書く行為との往還に意識的な著者らしい結論だが、この一節だけを切りとっていえば、たとえばAがAであるゆえんを文学は語りえないのか、氏のいう「矛盾構造」は果して、文学一般にまで拡大できる総論なのかといった疑問を持ちだすことは可能であろう。しかし、氏の『灰燼』論がそうした些少の疑義を封殺するに足る論理的整合性を完成していることも、また確かである。まことにみごとな、論理と直観の力業なのである。

最後になったが、『『阿部一族』論――剽窃の系譜――』ははるかに安定した実証主義に立脚した論文で、立証の過程と論理の運びをあわせ、間然する余地がない。決して皮肉ではなく、集中の白眉である。昭和六十一年の三月から十月にかけて書きつがれた四篇の論文に、書きおろしの一篇を加えて集大成したものだが、テーマの持続力のみごとさもさることながら、尾形働氏や藤本千鶴子・蒲生芳郎氏らの先行論文に緻密な検討を加えながら、原拠の『阿部茶事談』の改稿・増補の過程をみずから考証して、ほとんど「剽窃」か「翻訳」にちかい鷗外の創作方法の必然性を実証しようとした意欲的な力作である。『茶事談』の増補されてゆく経過に、歴史的時間の無意味につまずきながら、なお、人間存在の意味を問いつづけ、〈歴史〉をみずから編もうとした封建武士の意志を読む著者は、そのことを明晰に感じていた鷗外もまた、おなじ「〈歴史〉へと、ひたすら自らを併呑させて」いったと結論する。『阿部一族』の本文に即して、その具体を説く論証もてがたい。著者の方法は歴史小説と典拠との相関を解明するための方法論に、ひとつの規範を開いたものというべきである。

（昭61・11　三弥井書店刊　四六判　三二八頁　二二〇〇円）